

「いのちの価値」

作：千 玄室

語り：斉藤由貴

今の世の中、何か歯車がかみ合っていないような状態になっています。ガバナビリティー、すなわち国民による自主的な統治能力を持つ国が少なくなり、権力者の思いのままの国が戦いを挑み、民間の人々を苦しめているのです。食糧難で飢え、子供たちが疫病で毎日多く亡くなっています。まさに、人間生活に大きな影響を与え、未来のことより今を何とかせねばというのが現実であります。

トルストイの「戦争と平和」を読まれた方もいらっしゃるでしょう。終わりのほうにロシア貴族のニコライ・ボルコンスキー公爵の話として、人間の善と悪、すなわち悪徳のことですが、悪徳は怠惰と迷信・盲信、徳行は勤勉と知識だと言っています。

何が何でも自分の考え、思うことが第一というような聞く耳をもたぬ自我、そして「まあ明日にしよう」という怠け心。良い行いとは、何でも一生懸命やる本分を求め、やり遂げようとする努力、素直さであり、他から得る知識も大切ということなのです。

さあ皆さん、どうでしょうか。

私はこの悪行と徳行をいつも思い、自分が今そのどれに当てはまっているかを省みます。生きる以上その生きる「命」が何よりも大切です。

「いのち」の「い」は正しく生きる。

「の」は生きていくための望み、そして

「ち」は自分一人が活着ているのではなく、父・母と繋がる御先祖様からの

「血」を受けている。だから「いのち」は最も人生において大切なもので、生きるためにいつも「いのち」について考えなければ、人間としての価値はありません。

それぞれ生きていくため、父・母から畠をもらって、その畠に自分が何をしようかと目的の種を植え、せっせと耕さないと風や雨や日照で種を失ってしまいます。自分が努力し、勤勉をもって耕せば、その種は実るのです。自分が選び求めるもの、種を植えつけ耕しましょう。

私は先の大戦、第二次世界大戦のとき、大学生でした。戦局が悪くなり、一九四三年（昭和十八年）、大学生から軍に徴集され、海軍軍人として航空隊に選抜されました。言うにいわれぬほど凄まじい訓練を受け、毎日今日も生きていたという想いを抱き、そして海軍士官となり、特別攻撃隊の一員に選ばれたのです。多くの仲間、戦友は爆弾を飛行機にかかえ出撃。

南海の空に散りました。

私は待機命令の一言で命が助かり、復員、その後大学に戻りました。もう七十八年前のことで、百歳となった今も健康で生存しています。本来出撃し、沖縄周辺で敵艦船と戦い、散るはずだった私は地獄から這い上がり、忸怩たる思いで、今日まで生きてきたのです。亡き戦友を想うと、何とも言えない気持ちです。でも生かさせていただいた以上、天命と思い、茶道をもって世界平和への祈りを一盃のお茶に捧げ、行脚しております。

「平和」という言葉を使わなくてよい、真の平和が訪れるよう念じております。